活　動　報　告

１．はじめに

昨年 12 月 11 日、部落解放・人権政策確立要求京都市実行委員会は第 34 回大会を、京都府部落解放センターで開催しました。市実行委員会の構成団体から 47 人が参加し、市実行委員会の加藤章善会長は、「私の寺は夙（しゅく）という被差別部落で、現在他府県からの結婚は成立するが、近隣町村の恋愛結婚はむつかしいなどの差別がまだある。運動の成果もあり、子どもたちは実力があれば大企業にも採用されるようになるなどプラス面も見え、地道な取り組みを続けたい」と述べました。

来賓からは、京都府実行委員会を代表して平井斉己事務局長が、「個別法としての人権 3 法が成立し、現在京都府で条例づくりに取り組んでいる。京都府と京都府議会の全ての会派に要請行動をおこなってきた。コロナの感染拡大予防ということで何もかもがやりにくい状況にあり、こうした見えない敵が来た場合に攻撃的になってしまう人間の心は、部落差別にも通じる。みんなの人権を考えるという事は足元の自分に立場を置き換えて考えることだ」と挨拶しました。京都市からは別府正広文化市民局長が「コロナウイルス感染症の関係では、京都市内の累計が 200 名を超える広がりを見せていて、危機感を持って対策をしている」と述べ、誰一人取り残さない共生社会の実現に向けてともにあゆんでいきたいとする市長からのメッセージを代読しました。民主・市民フォーラム京都市会議員団、公明党、各市会議員団からは、通常ご挨拶をいただくものの、今回はメッセージ対応でお願いしました。立憲民主党から福山哲郎参議院議員が急遽駆け付け、ご挨拶をいただき、議事の進行にうつりました。

村上光幸事務局長が、活動報告、基調提案をおこない、会計報告、大会決議等の議案が順次採択されました。

２．京都市実行委員会独自事業

京都市実行委員会では、毎年大会後に独自事業として「考えてみませんか　あ

なたの人権・わたしの人権」を開催し、講演会をおこなっています。昨年は、「仏教の歴史に隠された『差別戒名・法名』」と題し、宗教・民俗学研究者の木津譲さんにご講演をいただきました。「長年この問題に携わってきた。今やこの問題は、私たち国民に見えなくなっているが、決して、解決し終わった問題ではない」と指摘。具体的には、京都でも 9 ケ寺に「畜男・畜女」「卜男・卜女」「過咎」などの差別戒名・法名が 62 霊につけられていた事例を資料に示しました。差別を「しない」だけではなく「なくす」ということに、どう取り組んでいくかが大事である。文字は人の心を傷つけ差別するためにあるものではなく、まして死者に差別戒名、差別記載をつけるためにあるのではない。部落問題、人権問題に取り組むことによって、差別の「痛み」がわかる人間になってほしい」と訴えました。

毎年 9 月に開催される「リベレーションフェスタ」は、昨年に引き続き、新型コロナウイルスの感染予防対策の観点から、フェスタ実行委員会で中止と決断されました。

３．中央集会と政府各省交渉

毎年、5 月と 10 月に開催されている部落解放・人権政策確立要求中央集会は、2020 年 10 月、2021 年 5 月の 2 度にわたり、新型コロナウイルス感染拡大の影響により中止となりました。

４．研究集会等への参加

京都市実行委員会では、部落解放・人権政策確立についての認識を深めるため、各研究集会等へ積極的に参加・協賛してきました。

具体的には、京都府実行委員会が開催した第 67 期、第 68 期の「京都人権文化講座」へ参加しました。

2021 年 2 月 23 日、「第 52 回人権交流京都市研究集会」に参加し、『めざそう！共生・協働の社会創造』と訴えました。集会は午前中の記念講演で「部落に生まれ　生きてきた」と題して、野口英代さん（90 才）と、宮崎茂さん（67 才）

のお二人がそれぞれの人生の歩みを話しました。宮崎さんは、母の日雇い労働である失対現場に連れられ、一人遊んでいた記憶から小学校低学年、教科書無償化がまだ始まらなかった時代に、姉が妹を背負って通学するも、ほとんど出席できなかった学校の思い出などを語りました。野口さんは九人兄弟の寺の子どもとして成長する過程で、子どもながらに部落での暮らしの中で「自分は何者であるか」という疑問に苛まれながら、答えを探しもがきつつ、兄や母を戦争中に失った体験などを、明晰な記憶とともに語り、会場に感銘を与えました。午後からは、「部落と人権」、「多文化共生」と、大きく二つの分科会を設けました。第 1 分科会では「公教育における部落問題の取り組みの充実に向けて」をサブタイトルとし上杉聡さんが、教育現場で現在必要な視点を講演しました。第 2 分科会は、テルサホールで劇団タルオルムが伝統民謡や楽器演奏を取り入れながら演じる「綿毛のように」の演劇を公演。後半は、日本語教育や芝居に携わる 4 人の女性によるシンポジウムが開催されました。

部落解放･人権政策確立要求京都府実行委員会が毎月 1 回定期発行している『ひゅーまんらいと』を市実行委員会の構成団体に発送しました。『ひゅーまんらいと』は 8 月で 426 号を数え、第 4 面の人権文化講座の講演録要旨は研修教材としても利用されています。